

■演題4 Vater 乳頭対側の約 5 cmの早期癌に対しLECS を施行した 1 例

代表演者：山本和幸 先生（斗南病院外科）

共同演者：〔斗南病院外科〕北城秀司、森大樹、花城清俊、佐藤大介、才川大介、芦立嘉智、鈴木善法
川原田陽、奥芝俊一

〔斗南病院消化器内科〕住吉徹哉、近藤仁

十二指腸腫瘍に対するLECSの有用性が報告されているが、適応、安全性に関しては症例の蓄積、検討が必要である。今回、我々はVater乳頭対側の約5cmの早期癌に対し、LECSを施行した1例を経験したので、報告する。

症例は63歳、男性。近医で十二指腸腫瘍を指摘され、切除目的に当院紹介となった。上部消化管内視鏡検査では十二指腸Vater乳頭対側に50mm大のⅡa病変を認めた。生検ではadenomaの診断であったが、内視鏡所見より粘膜癌の可能性が高いと判断し切除の方針となった。ESDのみでは穿孔のリスクが高く、LECSを施行した。経口内視鏡下に病変を一括切除し、同部位を腹腔鏡下に短軸方向に縫合閉鎖した。術後5日目に後腹膜に少量の液体貯留を認め、保存的加療を行い改善したため、術後13日目より経口摂取を開始、増悪なく術後20日目に退院となった。病理所見は腺癌と腺腫が混在しており、粘膜内癌の診断であった。術後現在まで3か月経過しているが、術前と同様に食事摂取が可能である。十二指腸LECSは腫瘍の局在、大きさ等、適応の判断が難しい場合があるが、本症例のような局在、大きさであればLECSの適応として良いと思われた。